

胃透視検査に伴うリスク(危険性)について

1.誤嚥

食道から胃へと飲み込むはずのバリウムが、誤って気管へ入ってしまうことです。

胃透視検査を受けた方の0.01%に起こるとされていますが、特に65歳以上では男性0.17%、女性0.08%と、より頻度が高いと報告されています。バリウムを誤嚥した場合、通常は無症状ですが、誤嚥が起きた人の1割に発熱がみられたとの報告があります。またバリウムが肺まで達した場合、以後胸部のX線検査で遺残バリウムによる陰影が残ることがあります。

2.便秘・腸閉塞・腸管穿孔

バリウムを服用すると便秘しやすい為、検査後に緩下剤を服用していただきます。

非常にまれな合併症として、腸閉塞(0.00005%)および腸管穿孔(0.00014%)が知られており、検査後に強い腹痛が生じた場合には、速やかな医療機関受診が必要です。

3.アレルギー症状

バリウム製剤の成分によりアレルギー症状が報告されています(0.0013%)。

代表的な症状は、発疹・咳・呼吸困難などです。バリウム製剤によってアレルギー症状を起こされたことがある方は、バリウム検査をお受けいただけません。

一般的に、喘息・アトピー、他の薬剤アレルギーをお持ちの方では、バリウムに限らず薬剤アレルギーがいくらか起こりやすいとされています。

4.放射線被曝

胃透視検査の被曝量は、0.6～4.9mSvとされ、成人の健康に影響するほどではありません。

ただし胎児は放射線の影響を強く受ける為、妊娠されている方や、妊娠の可能性のある方は胃透視検査を行っておりません。